

二百十日

夏目漱石



一冊堂青安文庫

二百十日

夏目漱石

一

ぶらりと両手を垂^さげたまま、圭^{けい}さんがどこからか帰^{かえ}つて来る。

「どこへ行^いつたね」

「ちよつと、町^{まち}を歩^{ある}行^いて来^きた」

「何か観^みるものがあるかい」

「寺^{てら}が一軒あつた」

「それから」

「銀杏^{いちょう}の樹^きが一本、門前^{もんぜん}にあつた」

「それから」

「銀杏^{いちょう}の樹^きから本堂^{もんだう}まで、一丁半ばかり、石^{いし}が敷^{しき}き詰^{しめ}めてあつた。非常に細^こ長い寺^{てら}だつた」

「這^{はい}入^いつて見たかい」

「やめて来た」

「そのほかに何もなにかね」

「別段何もない。いったい、寺と云うものは大概の村にはあるね、君」

「そうさ、人間の死ぬ所には必ずあるはずじゃないか」

「なるほどそうだね」と圭さん、首を捻^{ひね}る。圭さんは時々妙な事に感心する。しばらくして、捻^ひねった首を真直^{まっすぐ}にして、圭さんがこう云った。

「それから鍛冶屋^{かじや}の前で、馬の杓^{くつ}を替^かえるところを見て来たが実に巧みなものだね」

「どうも寺だけにしては、ちと、時間が長過ぎると思った。馬の杓^{くつ}がそんなに珍しいかい」

「珍らしくなくつても、見たのさ。君、あれに使う道具が幾通りあると思う」

「幾通りあるかな」

「あてて見たまえ」

「あてなくつても好^いいから教えるさ」

「何でも七つばかりある」

「そんなにあるかい。何と何だい」

「何と何だって、たしかにあるんだよ。第一爪をはがす鑿のと、鑿のを敲たたく槌つちと、それから爪を削けずる小刀と、爪を削えぐる妙なものと、それから……」

「それから何があるかい」

「それから変なものが、まだいろいろあるんだよ。第一馬のおとなしいには驚ろいた。あんなに、削られても、剝られても平気でいるぜ」

「爪だもの。人間だって、平気で爪を剪きるじゃないか」

「人間はそうだが馬だぜ、君」

「馬だって、人間だって爪に変わりはないやね。君はよっぽど呑のん気だよ」

「呑気だから見ていたのさ。しかし薄暗い所で赤い鉄を打つと奇麗きれだね。ぴちぴち火花が出る」

「出るさ、東京の真中でも出る」

「東京の真中でも出る事はあるが、感じが違うよ。こう云う山の中の鍛冶屋は第一、音から違う。そら、ここまで聞えるぜ」

初秋はつあきの日脚ひあしは、うそ寒く、遠い国の方へ傾かたむいて、淋さびしい山里の空気が、心細い夕暮れ

を促^{うな}がすなかに、かあんかあんと鉄を打つ音がする。

「聞えるだろう」と圭さんが云う。

「うん」と碌^{ろく}さんは答えたぎり黙然^{もくねん}としている。隣りの部屋で何だか二人しきりに話をしている。

「そこで、その、相手が竹刀^{しなひ}を落したんだあね。すると、その、ちよいと、小手^{こて}を取ったんだあね」

「ふうん。とうとう小手を取られたのかい」

「とうとう小手を取られたんだあね。ちよいと小手を取ったんだが、そこがそら、竹刀^{しなひ}を落したものだから、どうにも、こうにもしようがないやあね」

「ふうん。竹刀を落したのかい」

「竹刀は、そら、さっき、落してしまったあね」

「竹刀を落してしまつて、小手を取られたら困るだろう」

「困らああね。竹刀も小手も取られたんだから」

二人の話しはどこまで行つても竹刀と小手で持ち切っている。黙然^{もくねん}として、対坐^{たいざ}していた圭さんと碌さんは顔を見合わして、にやりと笑つた。

かあんかあんと鉄を打つ音が静かな村へ響き渡る。癩走かんぱしった上に何だか心細い。

「まだ馬の沓くつを打ってる。何だか寒いね、君」と圭さんは白い浴衣ゆかたの下で堅くなる。碌さんも同じく白地しろじの単衣ひとえの襟えりをかき合せて、だらしない膝頭ひざかしらを行儀ぎようぎよく揃そろえる。やがて圭さんが云う。

「僕の小供の時住んでた町の真中に、一軒豆腐屋とうふやがあつてね」

「豆腐屋があつて？」

「豆腐屋があつて、その豆腐屋の角かどから一丁ばかり爪先つまさき上がりに上がると寒磬寺かんけいじと云う御寺があつてね」

「寒磬寺と云う御寺がある？」

「ある。今でもあるだろう。門前から見るとただ大竹藪おおたけやぶばかり見えて、本堂も庫裏くらもないうだ。その御寺で毎朝四時頃になると、誰だか鉦かねを敲たたく」

「誰だか鉦を敲くつて、坊主が敲くんだろう」

「坊主だか何だか分らない。ただ竹の中でかんと幽かすかに敲くのだ。冬の朝なんぞ、霜しもが強く降つて、布団ふとんのなかで世の中の寒さを一二寸の厚さに遮さえぎつて聞いていると、竹藪のなかから、かにかん響いてくる。誰が敲くのだか分らない。僕は寺の前を通るた

びに、長い石盤いしだたみと、倒れかかった山門さんもんと、山門を埋め尽くすほどな大竹藪うずを見るのだが、一度も山門のなかを覗のぞいた事がない。ただ竹藪のなかで敲く鉦の音だけを聞いている、夜具うちの裏で海老えびのようになるのさ」

「海老のようになるって？」

「うん。海老のようになって、口のうちに、かんかん、かんかと云うのさ」
「妙だね」

「すると、門前の豆腐屋がきつと起きて、雨戸を明ける。ぎっぎつと豆を白うすで挽ひく音がする。ざざざあと豆腐の水を易かえる音がする」

「君の家は全体どこにある訳わけだね」

「僕のうちは、つまり、そんな音が聞える所にあるのさ」

「だから、どこにある訳だね」

「すぐ傍そばさ」

「豆腐屋の向むかひか、隣となりかい」

「なに二階にかいさ」

「どこの」

「豆腐屋の二階さ」

「へええ。そいつは……」と碌さん驚ろいた。

「僕は豆腐屋の子だよ」

「へええ。豆腐屋かい」と碌さんは再び驚ろいた。

「それから垣根の朝顔が、茶色に枯れて、引っ張るとがらがら鳴る時分、白い靄が一面に降りて、町の外れの瓦斯灯に灯がちらちらすると思うとまた鉦が鳴る。かんかん竹の奥で冴えて鳴る。それから門前の豆腐屋がこの鉦を合図に、腰障子をはめる」

「門前の豆腐屋と云うが、それが君のうちじゃないか」

「僕のうち、すなわち門前の豆腐屋が腰障子をはめる。かんかんと云う声を聞きながら僕は二階へ上がって布団を敷いて寝る。——僕のうちの吉原揚は旨かった。近所で評判だった」

隣り座敷の小手と竹刀は双方ともおとなしくなつて、向うの椽側では、六十余りの肥った爺さんが、丸い背を柱にもたして、胡坐のまま、毛抜きで顎の髯を一本一本に抜いている。髯の根をうんと抑えて、ぐいと抜くと、毛抜は下へ弾ね返り、顎は上へ反り返る。まるで器械のように見える。

「あれは何日掛いっかつたら抜けるだろう」と碌さんが圭さんに質問をかける。

「一生懸命にやったら半日くらいで済むだろう」

「そうは行くまい」と碌さんが反対する。

「そうかな。じゃ一日いちにちかな」

「一日や二日ふつかで奇麗きれいに抜けるなら訳わけはない」

「そうさ、ことによると一週間もかかるかね。見たまえ、あの丁寧に顚なを撫で廻しながら抜いてるのを」

「あれじゃ。古いのを抜いちまわないうちに、新しいのが生はえるかも知れないね」

「とにかく痛い事だろう」と圭さんは話頭わとうを転じた。

「痛いに違いないね。忠告してやろうか」

「なんて」

「よせつてさ」

「余計な事だ。それより幾日掛いっかつたら、みんな抜けるか聞いて見ようじゃないか」

「うん、よからう。君が聞くんだよ」

「僕はいやだ、君が聞くのさ」

「聞いても好いがつまらないじゃないか」

「だから、まあ、よそうよ」と圭さんは自己の申し出しを惜気もなし撤回した。

一度途切れた村鍛冶の音は、今日山里に立つ秋を、幾重の稲妻に砕くつもりか、かあんなかあんと澄み切った空の底に響き渡る。

「あの音を聞くと、どうしても豆腐屋の音が思い出される」と圭さんが腕組をしながら云う。

「全体豆腐屋の子がどうして、そんなになつたもんだね」

「豆腐屋の子がどんなになつたのさ」

「だって豆腐屋らしくないじゃないか」

「豆腐屋だって、肴屋だつて——なろうと思えば、何にでもなれるさ」

「そうさな、つまり頭だからね」

「頭ばかりじゃない。世の中には頭のいい豆腐屋が何人いるかわからない。それでも生涯豆腐屋さ。気の毒なものだ」

「それじゃ何だい」と碌さんが小供らしく質問する。

「何だって君、やっぱりなろうと思うのさ」

「なろうと思つたつて、世の中がしてくれないのがだいぶあるだろう」

「だから氣の毒だと云うのさ。不公平な世の中に生れれば仕方がないから、世の中がしてくれなくても何でも、自分でなろうと思ふのさ」

「思つて、なれなければ？」

「なれなくつても何でも思うんだ。思つてゐるうちに、世の中が、してくれるようになるんだ」と圭さんは横着おうちやくを云う。

「そう注文通りに行けば結構だ。ハハハハ」

「だって僕は今日までそうして来たんだもの」

「だから君は豆腐屋らしくないと云うのだよ」

「これから先、また豆腐屋らしくなつてしまふかも知れないかな。厄介やっかいだな。ハハハハ」

「なつたら、どうするつもりだい」

「なれば世の中がわるいのさ。不公平な世の中を公平にしてやろうと云うのに、世の中が云う事をきかなければ、向むかひの方が悪いのだろう」

「しかし世の中も何だね、君、豆腐屋がえらくなるようなら、自然えらい者が豆腐屋に

なる訳だね」

「えらい者た、どんな者だい」

「えらい者って云うのは、何さ。例えば華族とか金持とか云うものさ」と碌さんはすぐ様えらい者を説明してしまう。

「うん華族や金持か、ありや今でも豆腐屋じゃないか、君」

「その豆腐屋連が馬車へ乗ったり、別荘を建てたりして、自分だけの世の中のような顔をしているから駄目だよ」

「だから、そんなのは、本当の豆腐屋にになってしまうのさ」

「こっちがする気でも向がならないやね」

「ならないのをさせるから、世の中が公平になるんだよ」

「公平に出来れば結構だ。大いにやりたまえ」

「やりたまえじゃいけない。君もやらなくっちゃあ。——ただ、馬車へ乗ったり、別荘を建てたりするだけならいいが、むやみに人を圧逼するぜ、ああ云う豆腐屋は。自分が豆腐屋の癖に」と圭さんはそろそろ慷慨し始める。

「君はそんな目に逢った事があるのかい」

圭さんは腕組をしたままふふんと云った。村鍛冶の音は不相変かあんかあんと鳴る。

「まだ、かんかん遣つてる。——おい僕の腕は太いだろう」と圭さんは突然腕まくりをして、黒い奴を碌さんの前に押しつけた。

「君の腕は昔から太いよ。そうして、いやに黒いね。豆を磨いた事があるのかい」

「豆も磨いた、水も汲んだ。——おい、君粗忽で人の足を踏んだらどっちが謝まるものだろう」

「踏んだ方が謝まるのが通則のようだな」

「突然、人の頭を張りつけたら？」

「そりや氣違だろう」

「氣狂なら謝まらないでもいいものかな」

「そうさな。謝まらさす事が出来れば、謝まらさす方がいいだろう」

「それを氣違の方で謝まれて云うのは驚ろくじゃないか」

「そんな氣違があるのかい」

「今の豆腐屋連はみんな、そう云う氣違ばかりだよ。人を圧迫した上に、人に頭を下げさせようとするんだぜ。本来なら向が恐れ入るのが人間だろうじゃないか、君」

「無論それが人間さ。しかし氣違の豆腐屋なら、うつちやつて置くよりほかに仕方があるまい」

圭さんは再びふふんと云った。しばらくして、

「そんな氣違を増長させるくらいなら、世の中に生れて来ない方がいい」とひとり言のようにつけた。

村鍛冶の音は、会話が切れるたびに静かな里の端から端までかあんと響く。

「しきりにかんかんやるな。どうも、あの音は寒磬寺の鉦に似ている」

「妙に氣に掛るんだね。その寒磬寺の鉦の音と、氣違の豆腐屋とでも何か関係があるのかい。——全体君が豆腐屋の倅から、今日までに變化した因縁はどう云う筋道なんだい。少し話して聞かせないか」

「聞かせてもいいが、何だか寒いじゃないか。ちよいと夕飯前に温泉に這入ろう。君いやか」

「うん這入ろう」

圭さんと碌さんは手拭をぶら下げて、庭へ降りる。棕櫚緒の貸下駄には都らしく宿の焼印が押してある。

「この湯は何に利くんだろう」と豆腐屋の圭さんが湯槽のなかで、ざぶざぶやりながら聞く。

「何に利くかなあ。分析表を見ると、何にでも利くようだ。——君そんなに、臍ばかりざぶざぶ洗ったって、出臍は癒らないぜ」

「純透明だね」と出臍の先生は、両手に温泉を掬んで、口へ入れて見る。やがて、
「味も何もない」と云いながら、流しへ吐き出した。

「飲んでもいいんだよ」と碌さんはがぶがぶ飲む。

圭さんは臍を洗うのをやめて、湯槽の縁へ肘をかけて漫然と、硝子越しに外を眺めている。碌さんは首だけ湯に漬かって、相手の臍から上を見上げた。

「どうも、いい体格だ。全く野生のままだね」

「豆腐屋出身だからなあ。体格が悪ると華族や金持ちと喧嘩は出来ない。こっちは一人向は大勢だから」

「さも喧嘩の相手があるような口振だね。当の敵は誰だい」

「誰でも構わないさ」

「ハハハ呑気のんきなもんだ。喧嘩にも強そうだが、足の強いには驚おどろいたよ。君といっしょでなければ、きのうここまでくる勇氣はなかったよ。実は途中で御免蒙ごめんこうむろうかと思つた」

「實際少し気の毒だったね。あれでも僕はよほど加減して、歩行あるいたつもりだ」

「本當かい？ はたして本當ならえらいものだ。——何だか怪しいな。すぐ付け上がるからいやだ」

「ハハハ付け上がるものか。付け上がるのは華族と金持ばかりだ」

「また華族と金持ちか。眼かたきの敵だね」

「金はなくつても、こつちは天下の豆腐屋だ」

「そうだ、いやしくも天下の豆腐屋だ。野生の腕力家だ」

「君、あの窓の外に咲いている黄色い花は何だろう」

碌ねさんは湯の中で首を振ねじ向ける。

「かぼちゃさ」

「馬鹿あ云つてゐる。かぼちゃは地の上を這はつてゐるものだ。あれは竹へからまって、風呂

場の屋根へあがっているぜ」

「屋根へ上がっちゃ、かぼちゃになれないかな」

「だっておかしいじゃないか、今頃花が咲くのは」

「構うものかね、おかしいたって、屋根にかぼちゃの花が咲くさ」

「そりや唄かい」

「そうさな、前半は唄のつもりでもなかったんだが、後半に至って、つい唄になつてしまったようだ」

「屋根にかぼちゃが生なるようだから、豆腐屋が馬車なんかへ乗るんだ。不都合千万だよ」

「また慷慨こうがいか、こんな山の中へ来て慷慨したって始まらないさ。それより早く阿蘇あそへ登って噴火口から、赤い岩が飛び出すところでも見るさ。——しかし飛び込んだじゃ困るぜ。——何だか少し心配だな」

「噴火口は実際猛烈なものだろうな。何でも、沢庵石たくあんいしのような岩が真赤になつて、空中へ吹き出すそうだぜ。それが三四町四方一面に吹き出すのだから壮さかんに違ない。——あしたは早く起きなくっちゃ、いけないよ」

「うん、起きる事は起きるが山へかかってから、あんなに早く歩行いちゃ、御免だ」と
碌さんはすぐ予防線を張った。

「ともかくも六時に起きて……」

「六時に起きる？」

「六時に起きて、七時半に湯から出て、八時に飯を食って、八時半に便所から出て、そうして宿を出て、十一時に阿蘇神社へ参詣して、十二時から登るのだ」

「へえ、誰が」

「僕と君がさ」

「何だか君一人りで登るようだぜ」

「なに構わない」

「ありがたい仕合せだ。まるで御供のようだね」

「うふん。時に昼は何を食うかな。やっぱり鰻飩にして置くか」と圭さんが、あすの昼飯の相談をする。

飯の相談をする。

「鰻飩はよすよ。ここいらの鰻飩はまるで杉箸を食うようで腹が突張ってたまらない」

「では蕎麦か」

「蕎麦も御免だ。僕は麵類^{めんるい}じゃ、とても凌^{しの}げない男だから」

「じゃ何を食^くうつもりだい」

「何でも御馳走^{ごちそう}が食^くいたい」

「阿蘇^{あそ}の山の中に御馳走があるはずがないよ。だからこの際、ともかくも鰻^{うなぎ}で間に合^あせて置いて……」

「この際は少し変だぜ。この際た、どんな際なんだい」

「剛健な趣味を養成するための旅行だから……」

「そんな旅行なのかい。ちつとも知らなかったぜ。剛健はいいが鰻^{うなぎ}は平^{ひら}に不賛成だ。こう見えても僕は身分^{みぶん}が好^いいんだからね」

「だから柔弱^{にゅうじやく}でいけない。僕なぞは学資に窮^{きゆう}した時、一日に白米二合で間に合^あせた事がある」

「瘦^やせたらう」と碌^{ろく}さんが気の毒な事を聞く。

「そんなに瘦^やせもしなかったがただ虱^{しちみ}が湧^わいたには困^こった。——君、虱^{しちみ}が湧^わいた事があるかい」

「僕はないよ。身分^{みぶん}が違^{ちが}わあ」

「まあ経験して見たまえ。そりや容易に獺^かり尽せるもんじやないぜ」

「煮え湯で洗濯^{せんたく}したらよかう」

「煮え湯？ 煮え湯ならいいかも知れない。しかし洗濯するにしてもただでは出来ないからな」

「なあるほど、銭^{ぜに}が一文もないんだね」

「一文もないのさ」

「君どうした」

「仕方がないから、襯衣^{シャツ}を敷居の上へ乗せて、手頃な丸い石を拾って来て、こつこつ叩^{たた}いた。そうしたら虱^{しらみ}が死なないうちに、襯衣が破れてしまった」

「おやおや」

「しかもそれを宿のかみさんが見つけて、僕に退去を命じた」

「さぞ困ったろうね」

「なあに困らんさ、そんな事で困っちゃ、今日まで生きていられるものか。これから追い追い華族や金持ちを豆腐屋にするんだからな。滅多^{めった}に困っちゃ仕方がない」

「すると僕なんぞも、今に、とおふい、油揚^{あぶらげ}、がんもどきと怒鳴^{どな}つて、あるかなくつ

ぢやないかね」

「華族でもない癖に」

「まだ華族にはならないが、金はだいぶあるよ」

「あつてもそのくらいじゃ駄目だ」

「このくらいじゃ豆腐とうふいと云う資格はないのかな。大おおに僕の財産を見縊みくびつたね」

「時に君、背中せなかを流してくれないか」

「僕わのも流すのかい」

「流してもいいさ。隣りの部屋の男も流しくらをやってたぜ、君」

「隣りの男の背中は似たり寄ったりだから公平だが、君の背中と、僕の背中とはだいぶ面積が違ちがうから損だ」

「そんな面倒な事を云うなら一人で洗うばかりだ」と圭さんは、両足りょうあしを湯壺ゆつぼの中にうんと踏ん張ふみつて、ぎゅうと手拭てぬぐいをしごいたと思つたら、両端りょうはしを握にぎつたまま、ぴしやりと、音を立てて斜はすに膏切あひぎりつた背中へあてがつた。やがて二の腕ふでへ力瘤ちからいぼが急に出来上がると、水を含んだ手拭は、岡のように肉づいた背中をぎぢぎぢ磨こすり始める。

手拭の運動につれて、圭さんの太い眉まゆがくしやりと寄つて来る。鼻の穴が三角形に膨ぼうち

脹はうして、小鼻こはなが勃はつとして左右に展開する。口は腹を切る時のように堅く喰くい締しったまま、両耳りょうみみの方まで割さけてくる。

「まるで仁王におうのようだね。仁王の行水ぎようすいだ。そんな猛烈な顔がよくできるね。こりや不思議だ。そう眼をぐりぐりさせなくつても、背中せなかは洗えそうなものだがね」

圭さんは何にも云わずに一生懸命にぐいぐい擦こする。擦こすっては時々、手拭てふきを温泉ゆ泉せんに漬つけて、充分水を含ませる。含ませるたんびに、碌ろくさんの顔へ、汗あせと膏あぶらと垢あかと温泉ゆ泉せんの交まじったものが十五六滴ごじゅうろくずつ飛とんで来る。

「こいつは降参だ。ちよつと失敬して、流しの方へ出るよ」と碌ろくさんは湯槽ゆぶねを飛とび出した。飛とび出しはしたものの、感心きんの極きよく、流しへ突つつ立たったまま、茫然ぼうぜんとして、仁王の行水を眺ながめている。

「あの隣りの客は元来何者だろう」と圭さんが槽ふねのなかから質問する。

「隣りの客どころじゃない。その顔は不思議だよ」

「もう済んだ。ああ好い心持だ」と圭さん、手拭てふきの一端いったんを放はなすや否いなや、ざぶんと温泉ゆ泉せんの中へ、石のように大きな背中を落おす。満槽まんそうの湯は一度に面喰めんくらって、槽ふねの底から大恐惶だいきようを持もち上げる。ざあっざあつと音がして、流しへ溢あふれだす。

「ああいい心持ちだ」と圭さんは波のなかで云った。

「なるほどそう遠慮なしに振舞ふるまったら、好い心持に相違ない。君は豪傑だよ」

「あの隣りの客は竹刀しなと小手こての事ばかり云つてるじゃないか。全体何者だい」と圭さんは呑気のんきなものだ。

「君が華族と金持ちの事を気にするようなものだろう」

「僕のは深い原因があるのだが、あの客のは何だか訳わけが分らない」

「なに自分じゃあ、あれで分つてゐるんだよ。――そこでその小手を取られたんだあね――と碌さんが隣りの真似まねをする。

「ハハハハそこでそら竹刀しなを落したんだあねか。ハハハハ。どうも氣楽なものだ」と圭さんも真似して見る。

「なにあれでも、実は慷慨家こうがいかも知れない。そらよく草双紙くさそうしにあるじゃないか。何とかの何々、実は海賊の張本毛剃けぞりくえもん九右衛門もんで」

「海賊らしくもないぜ。さつき温泉ゆに這入はいりに来る時、覗のぞいて見たら、二人共木枕きまくらをして、ぐうぐう寝ていたよ」

「木枕をして寝られるくらいの頭だから、そら、そこで、その、小手を取られるんだあ

ね」と碌さんは、まだ真似をする。

「竹刀も取られるんだあねか。ハハハハ。何でも赤い表紙の本を胸の上へ載^のせたまんま寝ていたよ」

「その赤い本が、何でもその、竹刀を落したり、小手を取られるんだあね」と碌さんは、どこまでも真似をする。

「何だろう、あの本は」

「伊賀^いの水月^{すいげつ}さ」と碌さんは、躊躇^{ちゆうちよ}なく答えた。

「伊賀の水月？ 伊賀の水月た何だい」

「伊賀の水月を知らないのかい」

「知らない。知らなければ恥かな」と圭さんはちよつと首を捻^{ひね}った。

「恥じゃないが話せないよ」

「話せない？ なぜ」

「なぜって、君、荒木又右衛門を知らないか」

「うん、又右衛門か」

「知ってるのかい」と碌さんまた湯の中へ這^{はい}入る。圭さんはまた槽^{ふね}のなかへ突^つ立^たった。

「もう仁王の行水は御免だよ」

「もう大丈夫、背中はあらわれない。あまり這入つてると逆上^{のぼせ}るから、時々こう立つのさ」

「ただ立つばかりなら、安心だ。——それで、その、荒木又右衛門を知ってるかい」

「又右衛門？　そうさ、どこかで聞いたようだね。豊臣秀吉の家来じゃないか」と圭さん、飛んでもない事を云う。

「ハハハハこいつはあきれた。華族や金持ちを豆腐屋にするだなんて、えらい事を云うが、どうも何も^{なんに}知らないね」

「じゃ待った。少し考えるから。又右衛門だね。又右衛門、荒木又右衛門だね。待ちたまえよ、荒木の又右衛門と。うん分った」

「何だい」

「相撲取^{すもうとり}だ」

「ハハハハ荒木、ハハハハ荒木、又ハハハハ又右衛門が、相撲取り。いよいよ、あきれしまった。実に無識だね。ハハハハ」と碌^{だいきようえつ}さんは大恐悦である。

「そんなにおかしいか」

「おかしいって、誰に聞かしたって笑うぜ」

「そんなに有名な男か」

「そうさ、荒木又右衛門じゃないか」

「だから僕もどこかで聞いたように思うのさ」

「そら、落ち行く先きは九州相良^{さがら}って云うじゃないか」

「云うかも知れんが、その句は聞いた事がないようだ」

「困った男だな」

「ちつとも困りやしない。荒木又右衛門ぐらい知らなかったって、毫^{ごう}も僕の人格には関係はしまい。それよりも五里^{やまみち}の山路が苦になって、やたらに不平を並べるような人が困った男なんだ」

「腕力や脚力を持ち出されちゃ駄目だね。とうてい叶^{かな}いっこない。そこへ行くと、どうしても豆腐屋出身の天下だ。僕も豆腐屋へ年期奉公に住み込んで置けばよかった」

「君は第一平生から懦弱^{だじやく}でいけない。ちつとも意志がない」

「これでよっぽど有るつもりなんだがな。ただ鰻^{うどん}に逢^あった時ばかりは全く意志が薄弱だと、自分ながら思うね」

「ハハハハつまらん事を云つていらあ」

「しかし豆腐屋にしちや、君のからだは奇麗過ぎるね」

「こんなに黒くつてもかい」

「黒い白いは別として、豆腐屋は大概ほりもの筍青があるじゃないか」

「なぜ」

「なぜか知らないが、筍青があるもんだよ。君、なぜほらなかった」

「馬鹿あ云つてらあ。僕のような高尚な男が、そんな愚ぐな真似をするものか。華族や金持がほれば似合うかも知れないが、僕にはそんなものは向かない。荒木又右衛門だつて、ほっちゃいまい」

「荒木又右衛門か。そいつは困つたな。まだそこまでは調べが届いていないからね」

「そりやどうでもいいが、ともかくもあしたは六時に起きるんだよ」

「そうして、ともかくも鰻へきえき鮓を食うんだろう。僕の意志の薄弱なものにも困るかも知れないが、君の意志の強固なものにも辟易するよ。うちを出てから、僕の云う事は一つも通らないんだからな。全く唯々いいだくだく諾々として命令に服しているんだ。豆腐屋主義はきびしいもんだね」

「なにこのくらい強硬にしないと増長していけない」

「僕がかい」

「なあに世の中の奴らがさ。金持ちとか、華族とか、なんとかとか、生意気に威張る奴らがさ」

「しかしそりや見当違だぜ。そんなものの身代りに僕が豆腐屋主義に屈従するなたまらない。どうも驚ろいた。以来君と旅行するのは御免だ」

「なあに構わんさ」

「君は構わなくつてもこっちは大いに構うんだよ。その上旅費は奇麗に折半せつぱんされるんだから、愚の極ぎよくだ」

「しかし僕の御蔭で天地の壯観たる阿蘇あその噴火口を見る事ができるだろう」

「可愛想かわいそうに。一人ひとりだつて阿蘇ぐらい登れるよ」

「しかし華族や金持なんて存外意地いぐじがないもんで……」

「また身代りか、どうだい身代りはやめにして、本当の華族や金持ちの方へ持つて行つたら」

「いずれ、その内持つてくつもりだがね。——意気地がなくなつて、理窟りくつがわからなくなつ

て、個人としちゃあ三文の価値もないもんだ」

「だから、どしどし豆腐屋にしてしまうさ」

「その内、してやろうと思ってるのさ」

「思ってるだけじゃ剣呑なものだ」

「なあに年が年中思っていりや、どうにかなるもんだ」

「随分気が長いね。もつとも僕の知ったものにね。虎列拉になるなと思っていたら、

とうとう虎列拉になったものがあるがね。君のもそう、うまく行くと好いけれども」

「時にあの髯を抜いてた爺さんが手拭をさげてやって来たぜ」

「ちょうど好いから君一つ聞いて見たまえ」

「僕はもう湯気に上がりそうだから、出るよ」

「まあ、いいさ、出ないでも。君がいやなら僕が聞いて見るから、もう少し這入って見たまえ」

「おや、あとから竹刀と小手がいつしよに来たぜ」

「どれ。なるほど、揃って来た。あとから、まだ来るぜ。やあ婆さんが来た。婆さんも、この湯槽へ這入るのかな」

「僕はともかくも出るよ」

「婆さんが這入るなら、僕もともかくも出よう」

風呂場を出ると、ひやりと吹く秋風が、袖口からすうと這入って、素肌を臍のあたりまで吹き抜けた。出臍の圭さんは、はつくしうと大きな苦沙弥を無遠慮にやる。上がり口に白芙蓉が五六輪、夕暮の秋を淋しく咲いている。見上げる向では阿蘇の山がごうごうと遠くながら鳴っている。

「あすこへ登るんだね」と碌さんが云う。

「鳴ってるぜ。愉快だな」と圭さんが云う。

三

「姉さん、この人は肥ってるだろう」

「だいぶん肥えていなはります」

「肥えてるって、おれは、これで豆腐屋だもの」

「ホホホ」

「豆腐屋じゃおかしいかい」

「豆腐屋の癖に西郷隆盛のような顔をしているからおかしいんだよ。時にこう、精進料^{しょうじんりょう}理^{うり}じゃ、あした、御山^{おやま}へ登れそうもないな」

「また御馳走^{ごちそう}を食いたがる」

「食いたがるって、これじゃ栄養不良になるばかりだ」

「なにこれほど御馳走があればたくさんだ。——湯葉^{ゆば}に、椎茸^{しいたけ}に、芋^{いも}に、豆腐、いろいろあるじゃないか」

「いろいろある事はあるがね。ある事は君の商売道具であるんだが——困ったな。昨^{きの}日は饅頭^{うどん}ばかり食わせられる。きょうは湯葉に椎茸ばかりか。ああああ」

「君この芋を食って見たまえ。掘りたてですこぶる美味^{びみ}だ」

「すこぶる剛健な味がしやしないか——おい姉さん、肴^{さかな}は何もないのかい」

「あいにく何もござりません」

「ござりまっせんは弱ったな。じゃ玉子があるだろう」

「玉子ならござりまっす」

「その玉子を半熟にして来てくれ」

「何に致します」

「半熟にするんだ」

「煮て参じますか」

「まあ煮るんだが、半分煮るんだ。半熟を知らないか」

「いいえ」

「知らない？」

「知りません」

「どうも辟易へきえきだな」

「何でござりますっす」

「何でもいいから、玉子を持って御出おいで。それから、おい、ちょっと待った。君ビールを飲むか」

「飲んででもいい」と圭さんは泰然たいぜんたる返事をした。

「飲んでもいいか、それじゃ飲まなくってもいいんだ。――よすかね」

「よさなくっても好いい。ともかくも少し飲もう」

「ともかくもか、ハハハ。君ほど、ともかくもの好きな男はないね。それで、あしたに

なると、ともかくも鯉鮓を食おうと云うんだろう。——姉さん、ビールもついでに持つてくるんだ。玉子とビールだ。分つたろうね」

「ビールはござりまつせん」

「ビールがない？——君ビールはないとさ。何だか日本の領地でないような気がする。情ない所だ」

「なければ、飲まなくつても、いいさ」と圭さんはまた泰然たる挨拶をする。

「ビールはござりませんばつてん、恵比寿ならござります」

「ハハハハいよいよ妙になって来た。おい君ビールでない恵比寿があるつて云うんだが、その恵比寿でも飲んで見るかね」

「うん、飲んでもいい。——その恵比寿はやっぱり饅頭に這入ってるんだろうね、姉さん」と圭さんはこの時ようやく下女に話しかけた。

「ねえ」と下女は肥後訛りの返事をする。

「じゃ、ともかくもその栓を抜いてね。罎ごと、ここへ持っておいで」

「ねえ」

下女は心得貌に起つて行く。幅の狭い唐縮緬をちよきり結びに御臀の上へ乗せて、緋

の筒袖をつんつるてんに着ている。髪だけは一種異様の束髪に、だいぶ碌さんと圭さんの胆を寒からしめたようだ。

「あの下女は異彩を放ってるね」と碌さんが云うと、圭さんは平氣な顔をして、

「そうさ」と何の苦もなく答えたが、

「単純でいい女だ」とあとへ、持って来て、木に竹を接いだようにつけた。

「剛健な趣味がありやしないか」

「うん。實際田舎者の精神に、文明の教育を施すと、立派な人物が出来るんだがな。惜しい事だ」

「そんなに惜しけりや、あれを東京へ連れて行って、仕込んで見るがいい」

「うん、それも好かろう。しかしそれより前に文明の皮を剥かなくっちゃ、いけない」

「皮が厚いからなかなか骨が折れるだろう」と碌さんは水瓜のような事を云う。

「折れても何でも剥くのだ。奇麗な顔をして、下卑た事ばかりやってる。それも金がない奴だと、自分だけで済むのだが、身分がいいと困る。下卑た根性を社会全体に蔓延させるからね。大変な害毒だ。しかも身分がよかつたり、金があつたりするものに、よくこう云う性根の悪い奴があるものだ」

「しかも、そんなのに限って皮がいよいよ厚いんだろう」

「体裁だけはすこぶる美事みごとなものさ。しかし内心はあの下女よりよっぽどずれているんだから、いやになってしまふ」

「そうかね。じゃ、僕もこれから、ちと剛健党ごうけんとうの御仲間入りをやろうかな」

「無論の事さ。だからまず第一着だいいちちやくにあした六時に起きて……」

「御昼に鰻鮓うどんを食ってか」

「阿蘇あその噴火口を観て……」

「癩癧かんしゃくを起して飛び込まないように要心ようじんをしてか」

「もつとも崇高なる天地間の活力現象に対して、雄大の氣象きしやうを養って、齷齪あくそくたる塵事じんじを超越するんだ」

「あんまり超越し過ぎるとあとで世の中が、いやになって、かえって困るぜ。だからそのところは好加減いいかげんに超越して置く事にしようじゃないか。僕の足じゃとうていそうえらく超越出来そうもないよ」

「弱い男だ」

筒袖つつそでの下女が、盆の上へ、麦酒ビールを一本、洋盃コップを二つ、玉子を四個、並べつくして持つ

てくる。

「そら恵比寿が来た。この恵比寿がビールでないんだから面白い。さあ一杯いっぱい飲のむかい」と碌さんが相手に洋盃を渡す。

「うん、ついでにその玉子を二つ貰おうか」と圭さんが云う。

「だって玉子は僕が誂あつらえたんだぜ」

「しかし四つとも食う氣かい」

「あしたの饅頭うどんが氣になるから、このうち二個は携帯して行いこうと思うんだ」

「うん、そんなら、よそう」と圭さんはすぐ断念する。

「よすとなると氣の毒だから、まあ上げよう。本来なら剛健党が玉子なんぞを食うのは、ちと贅沢ぜいたくの沙汰だが、可哀想かわいそうでもあるから、——さあ食うがいい。——姉さん、この恵比寿はどこでできるんだね」

「おおかた熊本でござりまっしょ」

「ふん、熊本製の恵比寿か、なかなか旨うまいや。君どうだ、熊本製の恵比寿は」

「うん。やっぱり東京製と同じようだ。——おい、姉さん、恵比寿はいいが、この玉子は生なまだぜ」と玉子を割った圭さんはちよつと眉をひそめた。

「ねえ」

「生だと云うのに」

「ねえ」

「何だか要領を得ないな。君、半熟を命じたんじゃないか。君のも生か」と圭さんは下女を捨てて、碌さんに向ってくる。

「半熟を命じて不熟を得たりか。僕のを一つ割って見よう。——おやこれは駄目だ……」

「うで玉子か」と圭さんは首を延^{のば}して相手の膳^{ぜん}の上を見る。

「全熟だ。こっちのはどうだ。——うん、これも全熟だ。——姉さん、これは、うで玉子じゃないか」と今度は碌さんが下女にむかう。

「ねえ」

「そうなのか」

「ねえ」

「なんだか言葉の通じない国へ来たようだな。——向うの御客さんのが生玉子で、おれのは、うで玉子なのかい」

「ねえ」

「なぜ、そんな事をしたのだい」

「半分煮て参じました」

「なあるほど。こりゃ、よく出来てらあ。ハハハハ、君、半熟のいわれが分ったか」と
碌さんよこで横手を打つ。

「ハハハハ単純なものだ」

「まるで落しおとし嘸ばなし見たようだ」

「間違いましたか。そちらのも煮て参じますか」

「なにこれでいいよ。——姉さん、ここから、阿蘇まで何里あるかい」と圭さんが玉子
に關係のない方面へ出て来た。

「ここが阿蘇でござりまつす」

「ここが阿蘇なら、あした六時に起きるものはない。もう二三日にさんちとうりゅう逗留して、すぐ熊本
へ引き返そうじゃないか」と碌さんがすぐ云う。

「どうぞ、いつまでも御逗留なさいまつせ」

「せっかく、姉さんも、ああ云つて勧めるものだから、どうだろう、いつそ、そうした

ら」と碌さんが圭さんの方を向く。圭さんは相手にしない。

「ここも阿蘇だって、阿蘇郡なんだろう」とやはり下女を追窮している。

「ねえ」

「じゃ阿蘇の御宮まではどのくらいあるかい」

「御宮までは三里でござります」

「山の上までは」

「御宮から二里でござりますたい」

「山の上はえらいだろうね」と碌さんが突然飛び出してくる。

「ねえ」

「御前登った事があるかい」
おまえ

「いいえ」

「じゃ知らないんだね」

「いいえ、知りません」

「知らないや、しょうがない。せっかく話を聞こうと思ったのに」

「御山へ御登りなさいますか」

「うん、早く登りたくって、仕方がないんだ」と圭さんが云うと、

「僕は登りたくなくって、仕方がないんだ」と碌さんが打ち壊した。

「ホホホそれじゃ、あなただけ、ここへ御逗留なさいませ」

「うん、ここで寝転んで、あのごうごう云う音を聞いている方が楽なようだ。ごうごうと云やあ、さつきより、だいぶ烈はげしくなつたようだぜ、君」

「そうさ、だいぶ、強くなつた。夜のせいだろう」

「御山が少し荒れておりますたい」

「荒れると烈しく鳴るのかね」

「ねえ。そうしてよながたくさんに降つて参りますたい」

「よなた何だい」

「灰でござりませす」

下女は障子をあけて、椽側へ人指しゆびを擦りつけながら、

「御覧なさいませ」と黒い指先を出す。

「なるほど、始終降しじゅうってるんだ。きのうは、こんなじゃなかったね」と圭さんが感心する。

「ねえ。少し御山が荒れておりますたい」

「おい君、いくら荒れても登る気かね。荒れ模様なら少々延ばそうじゃないか」

「荒れればなお愉快だ。滅多に荒れたところなんぞが見られるものじゃない。荒れる時と、荒れない時は火の出具合が大変違うんだそうだ。ねえ、姉さん」

「ねえ、今夜は大変赤く見えます。ちよと出て御覧なさいませ」

どれと、圭さんはすぐ椽側へ飛び出す。

「いやあ、こいつは熾だ。^{さかん}おい君早く出て見たまえ。大変だよ」

「大変だ？　大変じゃ出て見るかな。どれ。——いやあ、こいつは——なるほどえらいものだね——あれじゃとうてい駄目だ」

「何が」

「何がって、——登る途中で焼き殺されちまうだろう」

「馬鹿を云っていらあ。夜だから、ああ見えるんだ。実際昼間から、あのくらいやつてるんだよ。ねえ、姉さん」

「ねえ」

「ねえかも知れないが危険だぜ。ここにこうしていても何だか顔が熱いようだ」と碌さ

んは、自分の頬ほぺたを撫なで廻す。

「大袈裟おおげさな事ばかり云う男だ」

「だって君の顔だって、赤く見えるぜ。そらその垣の外に広い稲田があるだろう。あの青い葉が一面に、こう照らされているじゃないか」

「嘘うそばかり、あれは星のひかりで見えるのだ」

「星のひかりと火のひかりとは趣おもむきが違ちがうさ」

「どうも、君もよほど無学だね。君、あの火は五六里先きにあるのだぜ」

「何里先きだって、向うの方の空が一面に真赤になつてゐるじゃないか」と碌ろくさんは向むをゆびさして大きな輪えがを指の先で描えがいて見せる。

「よるだもの」

「夜だって……」

「君は無学だよ。荒木又右衛門は知らなくつても好いが、このくらいな事が分らなくつちや恥はだぜ」と圭さんは、横から相手の顔を見た。

「人格にかかわるかね。人格にかかわるのは我慢するが、命にかかわつちや降参だ」

「まだあんな事を云っている。——じゃ姉さんに聞いて見るがいい。ねえ姉さん。あの

くらい火が出たって、御山へは登れるんだろう」

「ねえい」

「大丈夫かい」と碌さんは下女の顔を覗き込む。

「ねえい。女でも登りますたい」

「女でも登っちゃ、男は是非登る訳かな。飛んだ事になったもんだ」

「ともかくも、あしたは六時に起きて……」

「もう分ったよ」

言い棄てて、部屋のなかに、ごろりと寝転んだ、碌さんの去ったあとに、圭さんは、黙然と、眉を軒げて、奈落から半空に向って、真直に立つ火の柱を見詰めていた。

四

「おいこれから曲がつていよいよ登るんだろう」と圭さんが振り返る。

「ここを曲がるかね」

「何でも突き当りに寺の石段が見えるから、門を這入らずに左へ廻れと教えたぜ」

「鯉鮓屋の爺さんがか」と碌さんはしきりに胸を撫で廻す。

「そうさ」

「あの爺さんが、何を云うか分ったもんじゃない」

「なぜ」

「なぜって、世の中に商売もあろうに、鯉鮓屋になるなんて、第一それからが不了簡だ」

「鯉鮓屋だって正業だ。金を積んで、貧乏人を圧迫するのを道楽にするような人間より遙かに尊といさ」

「尊といかも知れないが、どうも鯉鮓屋は性に合わない。——しかし、とうとう鯉鮓を食わせられた今となって見ると、いくら鯉鮓屋の亭主を恨んでも後の祭りだから、まあ、我慢して、これから曲がつてやろう」

「石段は見えるが、あれが寺かなあ、本堂も何もないぜ」

「阿蘇の火で焼けちまったんだらう。だから云わない事じゃない。——おい天氣が少々剣呑になって来たぜ」

「なに、大丈夫だ。天祐があるんだから」

「どこに」

「どこにでもあるさ。意思のある所には天祐がごろごろしているものだ」

「どうも君は自信家だ。剛健党になるかと思うと、天祐派になる。この次ぎには天誅組にでもなつて筑波山へ立て籠るつもりだろう」

「なに豆腐屋時代から天誅組さ。——貧乏人をいじめるような——豆腐屋だつて人間だ——いじめるつて、何らの利害もないんだぜ、ただ道楽なんだから驚ろく」

「いつそんな目に逢つたんだい」

「いつでもいいさ。桀紂と云えば古来から悪人として通り者だが、二十世紀はこの桀紂で充満しているんだぜ、しかも文明の皮を厚く被つてから小憎らしい」

「皮ばかりで中味のない方がいくらいなものかな。やつぱり、金があり過ぎて、退屈だと、そんな真似がしたくなるんだね。馬鹿に金を持たせると大概桀紂になりたがるんだろう。僕のような有徳の君子は貧乏だし、彼らのような愚劣な輩は、人を苦しめるために金銭を使っているし、困つた世の中だなあ。いっそ、どうだい、そう云う、ももんがあを十把一とからげにして、阿蘇の噴火口から真逆様に地獄の下へ落しちまったら」

「今に落としてやる」と圭さんは薄黒く渦巻く煙りを仰いで、草鞋足をうんと踏張つ

た。

「大変な権幕けんまくだね。君、大丈夫かい。十把一とからげを放り込まないうちに、君が飛び込んじやいけな

「あの音は壮烈だな」

「足の下が、もう揺れているようだ。——おいちよつと、地面へ耳をつけて聞いて見たまえ」

「どんなだい」

「非常な音だ。たしかに足の下がうなってる」

「その割に煙りがこないな」

「風のせいだ。北風だから、右へ吹きつけるんだ」

「樹きが多いから、方角が分らない。もう少し登ったら見当がつくだろう」

しばらくは雑木林ぞうきばやしの間に行く。道幅は三尺に足らぬ。いくら仲が善くても並んで歩行あるく訳には行かぬ。圭さんは大きな足を悠々と振って先へ行く。碌さんは小さな体軀からだをすぼめて、小股こまたに後から尾おといて行く。尾おといて行きながら、圭さんの足跡の大きいのに感心している。感心しながら歩行いて行くと、だんだんおくれしてしまう。

路は左右に曲折して爪先上りだから、三十分と立たぬうちに、圭さんの影を見失った。樹と樹の間をすかして見ても何にも見えぬ。山を下りる人は一人もない。上るものにも全く出合わない。ただ所々に馬の足跡がある。たまに草鞋の切れが茨にかかっている。そのほかに人の気色はさらにない、鰻鮓腹の碌さんは少々心細くなった。

きのうの澄み切った空に引き易えて、今朝宿を立つ時からの霧模様には少し掛念もあつたが、晴れさえすればと、好い加減な事を頼みにして、とうとう阿蘇の社までは漕ぎつけた。白木の宮に彌宜の鳴らす柏手が、森閑と立つ杉の梢に響いた時、見上げる空から、ぼつりと何やら額に落ちた。鰻鮓を煮る湯気が障子の破れから、吹いて、白く右へ靡いた頃から、午過ぎは雨かなとも思われた。

雑木林を小半里ほど来たら、怪しい空がとうとう持ち切れなくなつたと見えて、梢にしたたる雨の音が、さあと北の方へ走る。あとから、すぐ新しい音が耳を掠めて、翻える木の葉と共にまた北の方へ走る。碌さんは首を縮めて、えつと舌打ちをした。

一時間ほどで林は尽きる。尽きると云わんよりは、一度に消えると云う方が適當であろう。ふり返る、後は知らず、貫いて来た一筋道のほかは、東も西も茫々たる青草が波を打って幾段となく連なる後から、むくむくと黒い煙りが持ち上がってくる。噴火口こ

そ見えないが、煙りの出るのは、つい鼻の先である。

林が尽きて、青い原を半丁と行かぬ所に、大入道おおにゅうしやうの圭さんが空を仰いで立っている。蝙蝠傘こうもりは畳んだまま、帽子さえ、被らずかぶらずに毬栗頭いかりあたまをぬつくと草から上へ突き出して地形を見廻している様子だ。

「おうい。少し待ってくれ」

「おうい。荒れて来たぞ。荒れて来たぞうう。しつかりしろう」

「しつかりするから、少し待ってくれえ」と碌さんは一生懸命に草のなかを這はい上がる。ようやく追いつく碌さんを待ち受けて、

「おい何をぐずぐずしているんだ」と圭さんが遣やつつける。

「だから饅頭まんとうじゃ駄目だと云ったんだ。ああ苦しい。——おい君の顔はどうしたんだ。

真黒だ」

「そうか、君のも真黒だ」

圭さんは、無雑作むざうさに白地の浴衣ゆかたの片袖かたそでで、頭から顔を撫なで廻す。碌さんは腰から、ハシケチを出す。

「なるほど、拭ふくと、着物がどす黒くなる」

「僕のハンケチも、こんなだ」

「ひどいものだな」と圭さんは雨のなかに坊主頭を曝さらしながら、空模様を見廻す。

「よ・な・だ。よ・な・が雨に溶とけて降ふってくるんだ。そら、その薄すすきの上を見たまえ」と碌さんが指をさす。長い薄の葉は一面に灰を浴びて濡ぬれながら、靡なびく。

「なるほど」

「困ったな、こりゃ」

「なあに大丈夫だ。ついそこだもの。あの煙りの出る所を目当めあてにして行けば訳わけはない」

「訳はなさそうだが、これじゃ路みちが分らないぜ」

「だから、さっきから、待っていたのさ。ここを左りへ行くか、右へ行くかと云う、ちようど股またの所なんだ」

「なるほど、両方共路になつてゐるね。——しかし煙りの見当から云うと、左りへ曲がる方がよさそうだ」

「君はそう思うか。僕は右へ行くつもりだ」

「どうして」

「どうしてって、右の方には馬の足跡があるが、左の方には少しもない」

「そうかい」と碌さんは、からだ身軀を前に曲げながら、おお蔽いかかる草を押し分けて、五六歩、左の方へ進んだが、すぐに取つて返して、

「駄目のようだ。足跡は一つも見当らない」と云つた。

「ないだろう」

「そつちにはあるかい」

「うん。たつた二つある」

「二つぎりかい」

「そうさ。たつた二つだ。そら、ここここに」と圭さんはしゆすばり繻子張のこうちもり蝙蝠傘の先で、かぶさるすすき薄の下に、かす幽かに残る馬の足跡を見せる。

「これだけかい心細いな」

「なに大丈夫だ」

「天祐てんゆうじゃないか、君の天祐はあてにならない事夥おびただしいよ」

「なにこれが天祐さ」と圭さんが云い了らぬうちに、雨を捲まいて颯さつとおろす一陣の風が、碌さんの麦藁帽むぎわらぼうを遠慮なく、吹き込めて、五六間先まで飛ばして行く。眼に余る青草は、風を受けて一度に向うへ靡なびいて、見るうちに色が変わると思うと、また靡き返して

もとの態さまに戻る。

「痛快だ。風の飛んで行く足跡が草の上に見える。あれを見たまえ」と圭さんが幾重いくえとなく起伏する青い草の海を指さす。

「痛快でもないぜ。帽子が飛んじまった」

「帽子が飛んだ？ いいじゃないか帽子が飛んだって。取ってくるさ。取って来てやろうか」

圭さんは、いきなり、自分の帽子の上へ蝙蝠傘を重おもしに置いて、颯と、薄の中に飛び込んだ。

「おいこの見当か」

「もう少し左りだ」

圭さんの身躯は次第に青いものの中に、深くはまって行く。しまいには首だけになった。あとに残った碌さんはまた心配になる。

「おうい。大丈夫か」

「何だあ」と向うの首から声が出る。

「大丈夫かよう」

やがて圭さんの首が見えなくなつた。

「おうい」

鼻の先から出る黒煙りは鼠色ねずみいろの円柱まるばしらの各部が絶間たえまなく蠕動ぜんどうを起しつつあるごとく、むくむくと捲まき上がって、半空はんくうから大氣うちの裡とに溶け込んで碌さんの頭の上へ容赦なく雨と共に落ちてくる。碌さんは悄然しょうぜんとして、首の消えた方角を見つめている。

しばらくすると、まるで見当の違つた半丁ほど先に、圭さんの首が忽然こつぜんと現われた。

「帽子はないぞう」

「帽子はいらないよう。早く帰つてこうい」

圭さんは坊主頭を振り立てながら、薄すすきの中を泳いでくる。

「おい、どこへ飛ばしたんだい」

「どこだか、相談ましまが纏まとらないうちに飛ばしちまつたんだ。帽子はいいが、歩行あるくのは厭いやになつたよ」

「もういやになつたのか。まだあるかないじゃないか」

「あの煙と、この雨を見ると、何だか物凄ものすごくつて、あるく元気がなくなるね」

「今から駄々だだを捏ねこちや仕方がない。——壮快じゃないか。あのむくむく煙の出てくる

ところは」

「そのむくむくが気味が悪るいんだ」

「冗談じやうだん云っちゃ、いけない。あの煙の傍そばへ行くんだよ。そうして、あの中を覗のぞき込むんだよ」

「考えると全く余計な事だね。そうして覗き込んだ上に飛び込めば世話はない」

「ともかくもあるこう」

「ハハハハともかくもか。君がともかくもと云い出すと、つい釣り込まれるよ。さっきもともかくもで、とうとう鰻うどんを食っちまった。これで赤痢せきりにでも罹かければ全くともかくもの御蔭おかげだ」

「いいさ、僕が責任を持つから」

「僕の病気の責任を持ったって、しようがないじゃないか。僕の代理に病気になれもしまい」

「まあ、いいさ。僕が看病をして、僕が伝染して、本人の君は助けるようにしてやるよ」

「そうか、それじゃ安心だ。まあ、少々あるのかな」

「そら、天気もだいぶよくなつて来たよ。やっぱり天祐てんゆうがあるんだよ」

「ありがたい仕合せだ。あるく事はあるくが、今夜は御馳走ごちそうを食わせなくっちゃ、いやだぜ」

「また御馳走か。あるきさえすればきつと食わせるよ」

「それから……」

「まだ何か注文があるのかい」

「うん」

「何だい」

「君の経歴を聞かせるか」

「僕の経歴って、君が知ってる通りさ」

「僕が知ってる前のさ。君が豆腐屋の小僧であつた時分から……」

「小僧じゃないぜ、これでも豆腐屋の倅せがれなんだ」

「その倅の時、寒聲寺かんけいじの鉦かねの音を聞いて、急に金持がにくらしくなつた、因縁話いんねんばなしをさ」

「ハハハそんなに聞きたければ話すよ。その代り剛健党にならなくちゃいけないぜ。

君なんざあ、金持の悪党を相手にした事がないから、そんなに呑気なんだ。君はドイツキンスの両都物語りと云う本を読んだ事があるか」

「ないよ。伊賀の水月は読んだが、ディッキンスは読まない」

「それだからなお貧民に同情が薄いんだ。——あの本のねしまいの方に、御医者さんの獄中でかいた日記があるがね。悲惨なものだよ」

「へえ、どんなものだい」

「そりゃ君、仏国の革命の起る前に、貴族が暴威を振って細民を苦しめた事がかいてあるんだが。——それも今夜僕が寝ながら話してやろう」

「うん」

「なあに仏国の革命なんてえのも当然の現象さ。あんなに金持ちや貴族が乱暴をすりゃ、ああなるのは自然の理窟だからね。ほら、あの轟々鳴って吹き出すのと同じ事さ」と圭さんは立ち留まって、黒い煙の方を見る。

濛々と天地を鎖す秋雨を突き抜いて、百里の底から沸き騰る濃いものが渦を捲き、渦を捲いて、幾百噸の量とも知れず立ち上がる。その幾百噸の煙りの一分子がことごとく震動して爆発するかと思わるるほどの音が、遠い遠い奥の方から、濃いものと共に頭の

上へ躍り上がつて来る。

雨と風のなかに、毛虫のような眉を攢めて、余念もなく眺めていた、圭さんが、非常な落ちついた調子で、

「雄大だろう、君」と云った。

「全く雄大だ」と碌さんも真面目で答えた。

「恐ろしいくらいだ」しばらく時をきつて、碌さんが付け加えた言葉はこれである。

「僕の精神はあれだよ」と圭さんが云う。

「革命か」

「うん。文明の革命さ」

「文明の革命とは」

「血を流さないのさ」

「刀を使わなければ、何を使うのだい」

圭さんは、何にも云わずに、平手で、自分の坊主頭をぴしゃぴしゃと二返叩いた。

「頭か」

「うん。相手も頭でくるから、こっちも頭で行くんだ」

「相手は誰だい」

「金力や威力で、たよりのない同胞どうぼうを苦しめる奴らさ」

「うん」

「社会の悪徳を公然商売にしている奴らさ」

「うん」

「商売なら、衣食のためと云う言い訳も立つ」

「うん」

「社会の悪徳を公然道楽にしている奴らは、どうしても叩たたきつけなければならん」

「うん」

「君もやれ」

「うん、やる」

圭さんは、のっそりと踵くびすをめぐらした。碌さんは默然もくねんとして尾ついて行く。空にあるものは、煙りと、雨と、風と雲である。地にあるものは青い薄すすきと、女郎花おみなえしと、所々にわびしく交まじる桔梗きぎようのみである。二人は犢々けいけいとして無人むにんの境きようを行く。

薄の高さは、腰を没するほどに延びて、左右から、幅、尺足らずの路を蔽おおうている。

身を横にしても、草に触れずに進む訳には行かぬ。触れば雨に濡れた灰がつく。圭さんも碌さんも、白地の浴衣に、白の股引に、足袋と脚絆だけを紺にして、濡れた薄をがさつかせて行く。腰から下はどぶ鼠のように染まった。腰から上といえども、降る雨に誘われて着く、よなを、一面に浴びたから、ほとんど下水へ落ち込んだと同様の始末である。

たださえ、うねり、くねっている路だから、草がなくつても、どこへどう続いているか見極めのつくものではない。草をかぶればなおさらである。地に残る馬の足跡さえ、ようやく見つけたくらいだから、あとの始末は無論天に任せて、あるいていると云わねばならぬ。

最初のうちこそ、立ち登る煙りを正面に見て進んだ路は、いつの間にやら、折れ曲つて、次第に横からよなを受くるようになった。横に眺める噴火口が今度は自然に後ろの方に見えだした時、圭さんはぴたりと足を留めた。

「どうも路が違うようだね」

「うん」と碌さんは恨めしい顔をして、同じく立ち留った。

「何だか、情ない顔をしているね。苦しいかい」

「實際情けないんだ」

「どこか痛むかい」

「豆が一面に出来て、たまらない」

「困ったな。よっぽど痛いかい。僕の肩へつらまったら、どうだね。少しは歩^あ行^るき好^いいかも知れない」

「うん」と碌さんは氣のない返事をしたまま動かない。

「宿へついたら、僕が面白い話をするよ」

「全体いつ宿へつくんだい」

「五時には湯元へ着く予定なんだが、どうも、あの煙りは妙だよ。右へ行っても、左へ行っても、鼻の先にあるばかりで、遠くもならない、近くもならない」

「上^のりたてから鼻の先にあるぜ」

「そうさな。もう少しこの路を行って見ようじゃないか」

「うん」

「それとも、少し休むか」

「うん」

「どうも、急に元気がなくなつたね」

「全く饅飩うどんの御蔭おかげだよ」

「ハハハハ。その代り宿へ着くと僕が話しの御馳走ごちそうをするよ」

「話しも聞きたくなかつた」

「それじゃまたビールでない恵比寿えびすでも飲むさ」

「ふふん。この様子じゃ、とても宿へ着けそうもないぜ」

「なに、大丈夫だよ」

「だって、もう暗くなつて来たぜ」

「どれ」と圭さんは懷中時計を出す。「四時五分前だ。暗いのは天氣のせいだ。しかしこう方角が變つて来ると少し困るな。山へ登つてから、もう二三里はあるいたね」

「豆の様子じゃ、十里くらいあるいてるよ」

「ハハハハ。あの煙りが前に見えたんだが、もうずっと、後ろうしろになつてしまった。すると我々は熊本の方へ二三里近付いた訳かね」

「つまり山からそれだけ遠ざかつた訳さ」

「そう云えばそうさ。——君、あの煙りの横の方からまた新しい煙が見えだしたぜ。あ

れが多分、新しい噴火口なんだろう。あのむくむく出るところを見ると、つい、そこにあるようだがな。どうして行かないだろう。何でもこの山のつい裏に違いないんだが、路がないから困る」

「路があつたつて駄目だよ」

「どうも雲だか、煙りだか非常に濃く、頭の上へやってくる。壮さかんなものだ。ねえ、君」

「うん」

「どうだい、こんな凄すこい景色はとても、こう云う時でなけりや見られないぜ。うん、非常に黒いものが降つて来る。君あたまが大変だ。僕の帽子を貸してやろう。——こう被かぶつてね。それから手拭てぬぐいがあるだろう。飛ぶといけないから、上から結いわいつけるんだ。——僕がしばつてやろう。——傘かさは、畳たたむがいい。どうせ風に逆さからうぎりだ。そうして杖つえにつくさ。杖が出来ると、少しは歩行あるけるだろう」

「少しは歩行きよくなった。——雨も風もだんだん強くなるようだね」

「そうさ、さつきは少し晴れそうだったがな。雨や風は大丈夫だが、足は痛むかね」

「痛いさ。登るときは豆が三つばかりだったが、一面になったんだもの」

「晩にね、僕が、煙草の吸殻すいがらを飯粒めしつぶで練ねって、膏藥こうやくを製つくってやろう」

「宿へつけば、どうでもなるんだが……」

「あるいてるうちが難義なんぎか」

「うん」

「困ったな。——どこか高い所へ登ると、人の通る路が見えるんだがな。——うん、あすこに高い草山が見えるだろう」

「あの右の方かい」

「ああ。あの上へ登ふんったら、噴火孔ふんかこうが一ひと眼めに見えるに違ちがい。そうしたら、路が分るよ」

「分るって、あすこへ行くまでに日が暮れてしまうよ」

「待ちたまえちよつと時計を見るから。四時八分だ。まだ暮れやしない。君ここに待まちていたまえ。僕がちよつと物見ものみをしてくるから」

「待まちってるが、歸りに路が分らなくなると、それこそ大変だぜ。二人離れ離れになつちまうよ」

「大丈夫だ。どうしたって死ぬ氣遣きづかいはないんだ。どうかしたら大きな声を出して呼ぶ

よ」

「うん。呼んでくれたまえ」

圭さんは雲と煙の這い廻るなかへ、猛然として進んで行く。碌さんは心細くもただ一人薄のなかに立って、頼みにする友の後姿を見送っている。しばらくするうちに圭さんの影は草のなかに消えた。

大きな山は五分に一度ぐらいずつ時をきつて、普段よりは烈しく轟となる。その折は雨も煙りも一度に揺れて、余勢が横なぐりに、悄然と立つ碌さんの体軀へ突き当るように思われる。草は眼を走らす限りを尽くしてことごとく煙りのなかに靡く上を、さあさあと雨が走って行く。草と雨の間を大きな雲が遠慮もなく這い廻る。碌さんは向うの草山を見つめながら、顫えている。よ・な・の・し・ず・く・は、碌さんの下腹まで浸み透る。

毒々しい黒煙りが長い渦を七巻まいて、むくりと空を突く途端に、碌さんの踏む足の底が、地震のように撼いたと思った。あとは、山鳴りが比較的静まった。すると地面の下の方で、

「おおおい」と呼ぶ声がする。

碌さんは両手を、耳の後ろに宛てた。

「おおおい」

たしかに呼んでいる。不思議な事にその声が妙に足の下から湧わいて出る。

「おおおい」

碌さんは思わず、声をしるべに、飛び出した。

「おおおい」と痼かんの高い声を、肺の縮むほど絞しぼり出すと、太い声が、草の下から、
「おおおい」と応こたえる。圭さんに違ちがない。

碌さんは胸まで来る薄をむやみに押し分けて、ずんずん声のする方に進んで行く。

「おおおい」

「おおおい。どこだ」

「おおおい。ここだ」

「どこだああ」

「ここだああ。むやみにくるとあぶないぞう。落ちるぞう」

「どこへ落ちたんだああ」

「ここへ落ちたんだああ。気をつけろう」

「気はつけるが、どこへ落ちたんだああ」

「落ちると、足の豆が痛いぞうう」

「大丈夫だああ。どこへ落ちたんだああ」

「ここだあ、もうそれから先へ出るんじゃないよう。おれがそっちへ行くから、そこで待っているんだよう」

圭さんの胸間声は地面のなかを通って、だんだん近づいて来る。

「おい、落ちたよ」

「どこへ落ちたんだい」

「見えないか」

「見えない」

「それじゃ、もう少し前へ出た」

「おや、何だい、こりや」

「草のなかに、こんなものがあるから剣呑だ」

「どうして、こんな谷があるんだろう」

「火熔石かようせきの流れたあとだよ。見たまえ、なかは茶色で草が一本も生えていない」

「なるほど、厄介やっかいなものがあるんだね。君、上がるかい」

「上がれるものか。高さが二間ばかりあるよ」

「弱ったな。どうしよう」

「僕の頭が見えるかい」

「毬栗いぐりの片割れが少し見える」

「君ね」

「ええ」

「薄すすきの上へ腹這はらばいになつて、顔だけ谷の上へ乗り出して見たまえ」

「よし、今顔を出すから待っていたまえよ」

「うん、待つてる、ここだよ」と圭さんは蝙蝠傘こうもりで、崖がけの腹をほとんど叩たたく。碌ろくさんは見当を見計みはからつて、ぐしゃりと濡れ薄の上へ腹をつけて恐る恐る首だけを溝みぞの上へ出して、

「おい」

「おい。どうだ。豆は痛むかね」

「豆なんざどうでもいいから、早く上がってくれたまえ」

「ハハハハ大丈夫だよ。下の方が風があたりなくつて、かえつて楽らくだぜ」

「楽だって、もう日が暮れるよ、早く上がらないと」

「君」

「ええ」

「ハンケチはないか」

「ある。何にするんだい」

「落ちる時に蹴爪けつまずいて生爪なまつめを剥はがした」

「生爪を？ 痛むかい」

「少し痛む」

「あるけるかい」

「あるけるとも。ハンケチがあるなら抛なげてくれたまえ」

「裂いてやろうか」

「なに、僕が裂くから丸めて抛なげてくれたまえ。風で飛ぶと、いけないから、堅く丸めて落すんだよ」

「じくじく濡ぬれてるから、大丈夫だ。飛ぶ気遣きづかいはない。いいか、抛なげるぜ、そら」

「だいぶ暗くなつて来たね。煙は相変らず出ているかい」

「うん。空中一面の煙だ」

「いやに鳴るじゃないか」

「さっきより、烈はげしくなったようだ。——ハンケチは裂けるかい」

「うん、裂けたよ。繃ほうたい帯はもうでき上がった」

「大丈夫かい。血が出やしないか」

「足袋たびの上へ雨といっしょに煮染にじんでる」

「痛そうだね」

「なあに、痛いたって。痛いのは生きてる証拠だ」

「僕は腹が痛くなった」

「濡ぬれた草の上に腹をつけているからだ。もういいから、立ちたまえ」

「立つと君の顔が見えなくなる」

「困るな。君いつその事に、ここへ飛び込まないか」

「飛び込んで、どうするんだい」

「飛び込めないかい」

「飛び込めない事もないが——飛び込んで、どうするんだい」

「いっしょにあるくのさ」

「そうしてどこへ行くつもりだい」

「どうせ、噴火口から山の麓^{ふもと}まで流れた岩のあとなんだから、この穴の中をあるいていたら、どこかへ出るだろう」

「だって」

「だって厭^{いや}か。厭^{いや}じゃ仕方がない」

「厭^{いや}じゃないが——それより君が上がれると好いんだがな。君どうかして上がつて見ないか」

「それじゃ、君はこの穴の縁^{ふち}を伝^{つた}って歩^{ある}行くさ。僕は穴の下をあるくから。そうしたら、上下で話^{うえした}が出来^{うえした}るからいいだろう」

「縁^{ふち}にや路^{みち}はありやしない」

「草ばかりかい」

「うん。草がね……」

「うん」

「胸^はくらいまで生^はえている」

「ともかくも僕は上がれないよ」

「上がれないって、それじゃ仕方がないな——おい。——おい。——おいって云うのにおい。なぜ黙ってるんだ」

「ええ」

「大丈夫かい」

「何が」

「口は利けるかい」

「利けるさ」

「それじゃ、なぜ黙ってるんだ」

「ちよつと考えていた」

「何を」

「穴から出る工夫をさ」

「全体何だって、そんな所へ落ちたんだい」

「早く君に安心させようと思って、草山ばかり見つめていたもんだから、つい足元が御留守になって、落ちてしまった」

「それじゃ、僕のために落ちたようなものだ。気の毒だな、どうかして上がって貰えないかな、君」

「そうさな。——なに僕は構わないよ。それよりか。君、早く立ちたまえ。そう草で腹を冷やしちや毒だ」

「腹なんかどうでもいいさ」

「痛むんだろう」

「痛む事は痛むさ」

「だから、ともかくも立ちたまえ。そのうち僕がここで出る工夫を考えて置くから」

「考えたら、呼ぶんだぜ。僕も考えるから」

「よし」

会話はしばらく途切れる。草の中に立つて碌さんが覚束なく四方を見渡すと、向うの草山へぶつかった黒雲が、峰の半腹で、どっと崩れて海のように濁ったものが頭を去る五六尺の所まで押し寄せてくる。時計はもう五時に近い。山のなかばはたださえ薄暗くなる時分だ。ひゆうひゆうと絶間なく吹き卸ろす風は、吹くたびに、黒い夜を遠い国から持ってくる。刻々と逼る暮色のなかに、嵐は正に吹きすさむ。噴火孔から吹き出す幾

万斛まんこくの煙りは卍まんべんのなかに万遍まんべんなく捲まき込まれて、嵐の世界を尽くして、どす黒く漲みなぎり渡る。

「おい。いるか」

「いる。何か考えついたかい」

「いいや。山の模様はどうだい」

「だんだん荒れるばかりだよ」

「今日は何日いっかだっけかね」

「今日は九月二日さ」

「ことによると二百十日かも知れないね」

会話はまた切れる。二百十日の風と雨と煙りは満目まんもくの草を埋め尽くして、一丁先は靡なびく姿さえ、判然はきと見えぬようになった。

「もう日が暮れるよ。おい。いるかい」

谷の中の人あそは二百十日の風に吹き浚さらわれたものか、うんとも、すんとも返事がない。阿蘇あその御山は割れるばかりにごううと鳴る。

碌ろくさんは青くなって、また草の上へ棒のように腹這はらばいになった。

「おおおい。おらんのか」

「おおおい。こつちだ」

薄暗い谷底を半町ばかり登った所に、ぼんやりと白い者が動いている。手招きをしているらしい。

「なぜ、そんな所へ行つたんだああ」

「ここから上がるんだああ」

「上がれるのかああ」

「上がれるから、早く来おおい」

碌さんは腹の痛いのも、足の豆も忘れて、脱兎だつといきおいの勢で飛び出した。

「おい。ここいらか」

「そこだ。そこへ、ちよつと、首を出して見てくれ」

「こうか。——なるほど、こりや大変浅い。これなら、僕が蝙蝠傘こうもりを上から出したら、それへ、取とっ捕らまとつて上がるだろう」

「傘かさだけじゃ駄目だ。君、気の毒だがね」

「うん。ちつとも気の毒じゃない。どうするんだ」

「兵児帯へこおびを解いて、その先を傘かさの柄えへ結びつけて——君の傘の柄は曲かまってるだろう」

「曲かまってるとも。大いに曲かまってる」

「その曲かまってる方へ結びつけてくれないか」

「結びつけるとも。すぐ結びつけてやる」

「結びつけたら、その帯の端はじを上からぶら下げてくれたまえ」

「ぶら下げるとも。訳わけはない。大丈夫だから待まちっていたまえ。——そうら、長いのが天てん

竺じくから、ぶら下がったろう」

「君、しっかり傘かさを握かっていなくっちゃいけないぜ。僕の身体からだは十七貫六百目あるんだ

から」

「何貫目あったって大丈夫だ、安心して上がりたまえ」

「いいかい」

「いいとも」

「そら上がるぜ。——いや、いけない。そう、ずり下がって来ては……」

「今度は大丈夫だ。今のは試ためして見ただけだ。さあ上がった。大丈夫だよ」

「君が滑すべると、二人共落ちてしまうぜ」

「だから大丈夫だよ。今のは傘の持ちようがわるかったんだ」

「君、薄^{すすき}の根へ足をかけて持ち^{こた}応えていたまえ。——あんまり前の方で蹈^ふん張^ばると、崖^{がけ}が崩^{くず}れて、足が滑^{すべ}るよ」

「よし、大丈夫。さあ上がった」

「足を踏ん張ったかい。どうも今度もあぶないようだな」

「おい」

「何だい」

「君は僕が力がないと思って、大^{おお}に心配するがね」

「うん」

「僕だって一人前の人間だよ」

「無論さ」

「無論なら安心して、僕に信頼したらよかろう。からだは小さいが、朋友を一人谷底から救い出すぐらいの事は出来るつもりだ」

「じゃ上がるよ。そらっ……」

「そらっ……もう少しだ」

豆で一面に腫れ上がった両足を、うんと薄の根に踏ん張った碌さんは、素肌を二百十日の雨に曝したまま、海老のように腰を曲げて、一生懸命に、傘の柄にかじりついてゐる。麦藁帽子を手拭で縛りつけた頭の下から、真赤にいきんだ顔が、八分通り阿蘇卸ろしに吹きつけられて、喰い締めた反つ齒の上にはよなが容赦なく降ってくる。

毛繻子張り八間の蝙蝠の柄には、幸い太い瘤だらけの頑丈な自然木が、付けてあるから、折れる氣遣はまずあるまい。その自然木の彎曲した一端に、鳴海絞りの兵児帯が、薩摩の強弓に新しく張った弦のごとくぴんと薄を押し分けて、先は谷の中にかくれてゐる。その隠れているあたりから、しばらくすると大きな毬栗頭がぬつと現われた。

やっと云う掛声と共に両手が崖の縁にかかるが早い、大入道の腰から上は、斜めに尻に挿した蝙蝠傘と共に谷から上へ出た。同時に碌さんは、どさんと仰向きになつて、薄の底に倒れた。

五

「おい、もう飯だ、起きないか」

「うん。起きないよ」

「腹の痛いのは癒なおったかい」

「まあ大抵癒たいていったようなものだが、この様子じゃ、いつ痛くなるかも知れないね。ともかくも鰻うどん飴たが崇たったんだから、容易には癒りそうもない」

「そのくらい口が利きければたしかなものだ。どうだいこれから出掛けようじゃないか」

「どこへ」

「阿蘇あそへさ」

「阿蘇へまだ行く気かい」

「無論さ、阿蘇へ行くつもりで、出掛けたんだもの。行かない訳わけには行かない」

「そんなものかな。しかしこの豆じゃ残念ながら致し方がない」

「豆は痛むかね」

「痛むの何のって、こうして寝ていても頭へずうんずうんと響くよ」

「あんなに、吸殻すいかをつけてやったが、毫ごうも利目きめがないかな」

「吸殻で利目があっちゃ大変だよ」

「だって、付けてやる時は大いにありがたそうだったぜ」

「癒ると思つたからさ」

「時に君はきのう怒つたね」

「いつ」

「裸はだかで蝙蝠傘こうもりを引つ張るときさ」

「だって、あんまり人を軽蔑けいべつするからさ」

「ハハハしかし御蔭おかげで谷から出られたよ。君が怒らなければ僕は今頃谷底で往生してしまつたかも知れないところだ」

「豆を潰つぶすのも構わずに引つ張つた上に、裸すすきで薄の中へ倒れてさ。それで君はありがたいとも何とも云わなかつたぜ。君は人情のない男だ」

「その代りこの宿まで担かついで来てやつたじゃないか」

「担いでくるものか。僕は独立して歩行あるいて来たんだ」

「それじゃここはどこだか知つてゐるかい」

「大おおに人を愚弄ぐろうしたものだ。ここはどこだって、阿蘇町さ。しかもともかくもの饅飩うどんを強しいられた三軒置いて隣の馬車宿だあね。半日山のなかを馳かけあるいて、ようやく下りて見たら元の所だなんて、全体何てえ間拔まぬけだろう。これからもう君の天祐てんゆうは信用しない

よ」

「二百十日だったから悪るかった」

「そうして山の中で芝居染しばいじみた事を云つてさ」

「ハハハハしかしあの時は大いに感服して、うん、うん、て云つたようだぜ」

「あの時は感心もしたが、こうなつて見ると馬鹿ばか氣げていらあ。君ありや真面目まじめかい」

「ふふん」

「冗談か」

「どっちだと思う」

「どっちでも好いが、真面目なら忠告したいね」

「あの時僕の経歴談を聴きかせろつて、泣いたのは誰だい」

「泣きやしないやね。足が痛くつて心細くなつたんだね」

「だって、今日は朝から非常に元氣じゃないか、昨日きのうた別人の觀かんがある」

「足の痛いにかかわらずか。ハハハハ。実はあんまり馬鹿氣ばかているから、少し腹を立てて見たのさ」

「僕に對してかい」

「だってほかに対するものがないから仕方がないさ」

「いい迷惑だ。時に君は粥かゆを食うなら誂あつらえてやろうか」

「粥もだがだね。第一、馬車は何時に出るか聞いて貰いたい」

「馬車でどこへ行く気だい」

「どこって熊本さ」

「帰るのかい」

「帰らなくってどうする。こんな所に馬車馬と同居していちゃ命が持たない。ゆうべ、

あの枕元でぼんぼん羽目を蹴けられたには実に弱ったぜ」

「そうか、僕はちつとも知らなかった。そんなに音がしたかね」

「あの音が耳に入はいらなければ全く剛健党に相違ない。どうも君は憎くらしいほど善よく寝る男だね。僕にあれば堅い約束をして、経歴談をきかせるの、医者いしやの日記を話すのつて、いざとなると、まるで正体なしに寝ちまうんだ。——そうして、非常ひじょうないびきびきを聞いて——」

「そうか、そりゃ失敬した。あんまり疲れ過ぎたんだよ」

「時に天気はどうだい」

「上天氣だ」

「くだらない天氣だ、昨日晴ればいい事を。——そうして顔は洗ったのかい」

「顔はどうに洗った。ともかくも起きないか」

「起きるって、ただは起きられないよ。裸で寝ているんだから」

「僕は裸で起きた」

「乱暴だね。いかに豆腐屋育ちだって、あんまりだ」

「裏へ出て、冷水浴をしていたら、かみさんが着物を持って来てくれた。乾かわいてるよ。ただ鼠色ねずみいろになつてゐるばかりだ」

「乾かわいてるなら、取り寄せてやろう」と碌ろくさんは、勢いきおいよく、手をぽんぽんたた敲く。台所の方で返事がある。男の声だ。

「ありや御者ごしやかね」

「亭主かも知れないさ」

「そうかな、寝ながら占うらなつてやろう」

「占うらなつてどうするんだい」

「占うらなつて君と賭かけをする」

「僕はそんな事はしないよ」

「まあ、御者か、亭主か」

「どっちかなあ」

「さあ、早くきめた。そら、来るからさ」

「じゃ、亭主にでもして置こう」

「じゃ君が亭主に、僕が御者だぜ。負けた方が今日一日命令に服するんだぜ」

「そんな事はきめやしない」

「御早う……御呼びになりましたか」

「うん呼んだ。ちよつと僕の着物を持って来てくれ。乾いてるだろうね」

「ねえ」

「それから腹がわるいんだから、粥かゆを焚たいて貰もらいたい」

「ねえ。御二人さんとも……」

「おれはただの飯めしで沢山だよ」

「では御一人さんだけ」

「そうだ。それから馬車は何時と何時に出るかね」

「熊本通いは八時と一時に出ますたい」

「それじゃ、その八時で立つ事にするからね」

「ねえ」

「君、いよいよ熊本へ帰るのかい。せつかくここまで来て阿蘇^{あそ}へ上^{のぼ}らないのはつまらないじゃないか」

「そりゃ、いけないよ」

「だってせつかく来たのに」

「せつかくは君の命令に困^よつて、せつかく来たに相違ないんだがね。この豆じゃ、どうにも、こうにも、——天祐^{てんゆう}を空^{むな}しくするよりほかに道はあるまいよ」

「足が痛めば仕方がないが、——惜しいなあ、せつかく思い立って、——いい天気だぜ、見たまえ」

「だから、君もいっしょに帰れたまえな。せつかくいっしょに来たものだから、いっしょに帰らないのはおかしいよ」

「しかし阿蘇へ登りに来たんだから、登らないで帰っちゃあ済まない」

「誰に済まないんだ」

「僕の主義に済まない」

「また主義か。窮屈な主義だね。じゃ一度熊本へ帰ってまた出直してくるさ」

「出直して来ちゃ気が済まない」

「いろいろなものに済まないんだね。君は元来強情過ぎるよ」

「そうでもないさ」

「だって、今までただの一遍でも僕の云う事を聞いた事がないぜ」

「幾度もあるよ」

「なに一度もない」

「昨日も聞いてるじゃないか。谷から上がってから、僕が登ろうと主張したのを、君がきのう何でも下りようと云うから、ここまで引き返したじゃないか」

「昨日は格別さ。二百十日だもの。その代り僕は饅飩うどんを何遍も喰ってるじゃないか」

「ハハハハ、ともかくも……」

「まあいいよ。談判はあとにして、ここに宿の人が待ってるから……」

「そうか」

「おい、君」

「ええ」

「君じゃない。君さ、おい宿の先生」

「ねえ」

「君は御者ぎよしゃかい」

「いいえ」

「じゃ御亭主かい」

「いいえ」

「じゃ何だい」

「雇人やとひにんで……」

「おやおや。それじゃ何にもならない。君、この男は御者でも亭主でもないんだとさ」

「うん、それがどうしたんだ」

「どうしたんだって——まあ好いや、それじゃ。いいよ、君、彼方あっちへ行っても好いよ」

「ねえ。では御二人さんとも馬車で御越しになりますか」

「そこが今悶着もんちやくちゆう中さ」

「へへへへ。八時の馬車はもう直ぐ、支度したくが出来ます」

「うん、だから、八時前に悶着をかたづけて置こう。ひとまず引き取ってくれ」

「へへへへ御緩ごゆっくり」

「おい、行つてしまった」

「行くのは当り前さ。君が行け行けと催促さいそくするからさ」

「ハハハありや御者ぎよしやでも亭主でもないんだとさ。弱つたな」

「何が弱つたんだい」

「何が。僕はこう思つてたのさ。あの男が御者ですと云うだろう。すると僕が賭かに勝つ訳わけになるから、君は何でも僕の命令に服さなければならなくなる」

「なるものか、そんな約束はしやしない」

「なに、したと見倣みなすんだね」

「勝手にかい」

「曖昧あいまいにさ。そこで君は僕といっしよに熊本へ帰らなくっちゃあ、ならないと云う訳わけさ」

「そんな訳になるかね」

「なると思つて喜こんでたが、雇人やといにんだつて云うからしょうがない」

「そりや当人が雇人だと主張するんだから仕方がないだろう」

「もし御者ですと云ったら、僕は彼奴あいつに三十銭やるつもりだったのに馬鹿な奴だやつ」

「何にも世話にならないのに、三十銭やる必要はない」

「だって君は一昨夜いっさくや、あの束髪そくはつの下女に二十銭やったじゃないか」

「よく知ってるね。――あの下女は単純で気に入ったんだもの。華族や金持ちより尊敬すべき資格がある」

「そら出た。華族や金持ちの出ない日はないね」

「いや、日に何遍云つても云い足りないくらい、毒々しくつてずうずうしい者だよ」

「君がかい」

「なあに、華族や金持ちがさ」

「そうかな」

「例たとえば今日わるい事をするぜ。それが成功しない」

「成功しないのは当り前だ」

「すると、同じようわるい事を明日あしたやる。それでも成功しない。すると、明後日あさってになつて、また同じ事をやる。成功するまでは毎日毎日同じ事をやる。三百六十五日でも

七百五十日でも、わるい事を同じように重ねて行く。重ねてさえ行けば、わるい事が、ひっくり返って、いい事になると思ってる。言語道断だ」

「言語道断だ」

「そんなものを成功させたら、社会はめっちゃくちゃだ。おいそうだろう」

「社会はめっちゃくちゃだ」

「我々が世の中に生活している第一の目的は、こう云う文明の怪物を打ち殺して、金も力もない、平民に幾分でも安慰を与えるのにあるだろう」

「ある。うん。あるよ」

「あると思うなら、僕といっしょにやれ」

「うん。やる」

「きつとやるだろうね。いいか」

「きつとやる」

「そこでともかくも阿蘇^{あそ}へ登ろう」

「うん、ともかくも阿蘇へ登るがよからう」

二人の頭の上では二百十一日の阿蘇が轟々^{ごうごう}と百年の不平を限りなき碧空^{へきくう}に吐き出して

いる。

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡いただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室
mail : issatudo@gmail.com
